

## 【講演記録/明治、大正、昭和に上海にあった日本の大学「東亜同文書院」高松講演・展示会】

## 日本初のビジネススクールとして誕生し、発展した東亜同文書院

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長 藤田 佳久  
 (2019年10月13日、サンポートホール高松)

## 1. はじめに

皆さん、こんにちは。ほとんど初めての方だと思いますけど、よろしくお願ひ致します。先ほど石田先生が非常にスマートな、現代風なディスプレイをやっていただきましたが、私は最初から手書きでやります。そういう点では古い世代でありますけども、私の世代になると字を書かないと頭に入らない。そういうことがあってこんなふうになっています。石田先生は文学者、文化研究者であるのですが、最初の出だしに地理学がやるような地図をたくさん見せていて、大したものだと思いますながら、皆さんにもイメージが結構できたのではないかなと思っております。書院の歴史の流れを通して現実感が出てきたものと思ひます。

今日の私の発表は日本で最初にビジネススクール。これは日本で最初ですけど、ある条件をつけると世界で最初と言えます。国際的には初めてのビジネススクールというのが書院であると。これは発展しながら総合的な中国研究になっていって大学へ昇格していくという道をたどっていきます。このビジネススクールの問題はそれが目的を果たしたかどうかというのは成果で見るのは卒業生です。卒業生はどういうふう活躍しているのか。大学というふうになると研究者も問題になるのですけど。一つ大きな柱は、そこで育った卒業生がどういう活

躍をしているのか。それが一つの大きな成果なのです。だからこちら香川へきても愛知大学を卒業された方々が今日来ておられます。皆さん活躍されていると思ひます。大変嬉しく思ひます。私は、現役はクリアしまして名誉教授ということですが、ほとんどセンターのほうに毎日出て研究を続けさせてもらっております。よろしくお願ひします。どういふかたちで卒業生の人たちが書院を卒業した後、活躍したのかというところを中心に今日はお話をさせていただきます。

## 2. 書院の三先覚

田辺課長からのお話の繰り返しになりますが、もう一回言えばこちらが東亜同文書院の三聖人です(図1)。この三人がそれ



図1 東亜同文書院の三聖人

に位置付けられております。もう一度名前だけ確認しておきます。一番真中が荒尾精です。この三人は皆、幕末から明治にかけて二十歳代の時にこの構想を持ったという点

で明治人としてはすごいなとも思います。明治という時代の凄さの一端はこういうような人が一遍に出て来るところかなと思います。荒尾精は尾張藩の士族の息子で、お父さんが明治維新で失業。東京へ出て金物屋をやって失敗します。一家離散になりますけど彼は近くの麴町警察署の所長さんに書生として拾われている。そこで初めて隣の朝鮮、それをバックで牛耳ってる清国という存在を知って、初めて本人としてはそれまでの鎖国が解けたのです。自分の殻の外側にそういう世界があることを知ったのです。そして一気にそちらのほうに関心を広げていったのです。

一方、一番右の近衛篤磨は小さい時は京都御所の育ちです。小さい時に京都御所を長州藩に焼かれ、孝明天皇も毒殺される。毒殺されるというのは教科書等ではクエスションになっていますけど、実際は長州藩に毒殺されたとされています。というようなことがあって、後半に東京へ出てきて小学校に半年もいかないでやめて、英語の先生に英語について習った。当時、身体が弱かったけれども英語の授業をやる前にいつも先生は相撲をとらせた。体力をつけたのです。この写真では体が少ししか映ってないけれど、がっちりした体格の持ち主になって、ヨーロッパに留学も世界旅行もできるようになったのです。

隣の清国に立ち寄って清国のトップの人たち、劉坤一とか、張之洞などの地方政治のトップの人たちと交渉して、これだけ清国が列強にやられているのは教育レベルが低いからだと言明し、日本と清国、お互いに学生を一緒にさせてそこでお互いに勉強し合いましょうと提案したのです。ところが清

国のほうは早く勉強させたいというわけで、石田先生がお見せしたような東京同文書院というのを近衛公が慌てて作って受け入れるわけです。それが東京同文書院となります。後にそれは東亜同文書院と一緒になって中華学生部となっていくわけです。

そういうきっかけを作った人の一人がこの近衛篤磨公で、清国の教育レベルが低いから教育をつけなきゃいけないという方向でしたけれども、もう一人の荒尾精は清国を強化するのは、清国と日本が貿易をすることによって経済力をつけることだとし、それが列強に対して一つの大きな防波堤になる、という発想で貿易実務者養成のほうを中心にすすめた。そういう二つの流れがあって、それが合体するわけです。合体して結局、荒尾精が基本的に作っていくビジネススクールのほうに近衛篤磨公が作った南京同文書院の流れを吸収していく。そこでビジネススクールが誕生して根津一が院長になる。荒尾精はその一方で台湾はじめ南アジアのほうと貿易のスタートに着手するのですが、台湾で残念ながらペストにかかって4日目ぐらいに亡くなってしまった。38歳。若いです。もの凄く仕事をやった人ではあったので日本中が彼の死を嘆き悲しんだのです。この場面は戦前、芝居などもたくさん上演されています。

一方、近衛篤磨は世界へ出向くわけです。二回行くわけです。一回目はプロシアに留学して6年間ドイツ語の世界です。英語を学んでいたからイギリス、アメリカへ行けると思っていたら明治政府の三条実美が反対して駄目だったのですが、三条が1年後に亡くなった後、プロシアなら留学してよろしいというわけで、語学を勉強してない

けれどドイツ語の世界に入って修行して 6 年間。6 年目にはライプチヒ大学という大学で学位を取るわけです。貴族で学位を取り、しかも英語ももちろんできる。そういう人ですから帰ってきたらすぐ貴族院の議長、学習院の院長になったのです。さらにこのあと、そういうことから、外務省が天皇にお願いしたんです。ヨーロッパのどこかの国の大使にさせたらどうかという話です。しかし、彼は学習院改革を今始めている最中だからと断ります。実際彼のドイツ留学の最初はボン大学でしたが、そこは貴族の学校だったのです。学生は皆、昼間から酒を飲んでいて勉強しないという学校だったのです。近衛公はこれはかなわんと思って、真面目な人ですね。次にライプチヒ大学へ移った。そこは猛勉強をする学生がたくさんいてそこでゼミ制度という教学システムを勉強して学習院へ持って帰ったのです。そういうわけで、近衛さんは教学のベースをそういうふうにしたので、日本の中でも高い評価を受けたわけです。

二回目に欧米を回った帰りに、清国に寄って清国地方官僚のトップの人たちと会話をして前述のように南京同文書院という学校作りというものをやってこられた。繰り返しの話になりましたけども。そういうような三人三様、面白いそれぞれの機能を持って東亜同文書院を作り上げたのです。これはもう奇跡かもしれません。なかなか面白い人材の組み合わせです。

しかし、近衛は長旅の影響か 42 歳で亡くなってしまいます。東南アジアも含めてあちこち回った各港では、日本の皇太子が来るという噂が流れ、多くの客が乗船して握手に来るから町を見るチャンスがなかった。

その過程のどこかで日本では見たこともないような病気にかかってしまったのです。体中から膿がふき出して 35 ヶ所を手術した。しかし彼は麻酔を打たせなかった。もし麻酔を打っていたら何を言い出すか分からない。それは自分だけ知っていることを言うかもしれないからというわけで麻酔を拒絶した。しかし、残念ながら 42 歳で亡くなってしまった。その時に息子の文麿は 14 歳でした。もう十年でも篤麿公が生きていたら、だいぶその後の日本的軍国主義は随分変わっていたかもしれません。とくに荒尾と近衛の二人とも生きてたらですね。これも歴史の過程ですけども、そういう軸から見ると日本も面白いところがあるんです。

なお、荒尾はなかなか立派な大きな体です。根津一はちょっと背が低いんです。荒尾精は 180 センチです。彼は巨漢です。当時の日本人としては珍しいほうでした。

### 3. 荒尾精の渡清と岸田吟香

皆さんのプリント、最初に配りしましたがけども、一番左の根津一、そして荒尾精、でもって何を作ったかと言うと日清貿易研究所を作った。貿易が必要だからという発想です。この経過をお話するともう 1 時間か 2 時間ぐらいいないときなくなるのですが、東亜同文書院の前身である日清貿易研究所という学校では、要するに日本人に清国との貿易取引ができる人材がいらないから貿易のセンターである上海に行って中国語を徹底的に勉強させる。英語もやるのです。清語、中国語、週 12 時間。英語が 8 時間ですから。一日に何時間も語学レッスンがあるのです。そういうような授業させたのですね。

もう一つは貿易実務のためのノウハウの教育です。これは荒尾精が、今日は時間がないから詳しくは言えませんが、中国に3年半滞在して清国事情を色々調べていた。その中で商売のやり方も調べていた。というようなことで、日清貿易研究所の発足をやるわけです。その後、東亜同文会が出来上がって、会長になった近衛篤磨が教育文化事業をやりながら先ほどの荒尾のビジネススクールである日清貿易研究所の成果も組み込みながら書院ができる。それがずっと戦後になって愛知大学へ繋がって行くのです(図2)。ところで、荒尾精はこういう感じの人です(図3)。軍隊のほうに入った時の写真です。

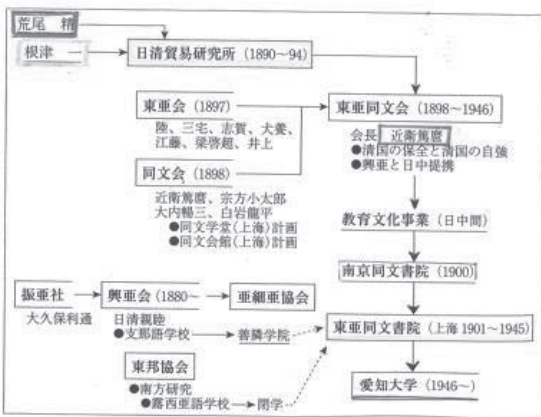


図2 荒尾、根津、近衛から東亜同文会、東亜同文書院そして愛知大学への系譜(上)

図3 荒尾精(下)



荒尾精はさっき言いましたように、これもあまり細かい説明ができないのですが、軍人育ちです。だから、同文書院は軍人が作ったとか、日本政府が作ったというのをよく言う人がいるんですよ。中国の若い研究者は皆同じことを言いますが、これは全く違います。彼は確かに警察署の書生さんの身になっちゃいましたからそういう道を歩みましたが、内側には商業、商人体験という経験があるんですね。小さい時に名古屋城の近くの枇杷島育ちで、青物市場の中で育ったからですね。お父さんが亡くなると東京で荒物屋をやった。その才能が認められて書生になったわけです。これが枇杷島への橋の絵です(図4)。向こうが名古屋城です。すぐ隣ですね。こちらのほうに青物市場があり、こんな感じの商売繁盛の場所です(図5)。名古屋の台所って言うのすかね。そういうところで商業的なセンスもあったわけです。

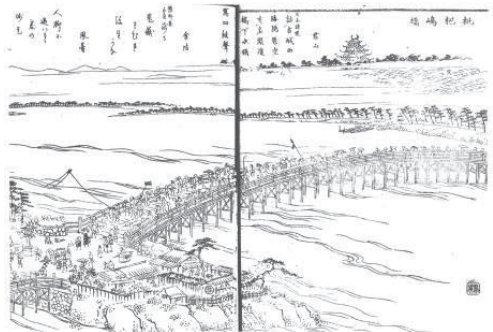
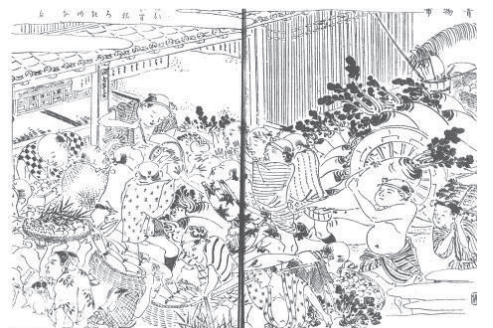


図4 枇杷島への橋の絵(上)

図5 青物市場(下)



彼はその後、陸軍大学まで行ってその後、参謀本部に入ります。清国に何とか行きたいと希望したけれども、上のほうはなかなかうんと言わなかった。特にまた軍籍を外して行きたいって言ったら、そんなかたちで行ったらすぐ殺されてしまうと云うんです。公式的な外国人なら認めてくれるけど、当時は、そうでない人っていうのは中国では誰だか分からないから殺されてしまうんですね。ということで、いよいよ清国行きが認められると上海にいた岸田吟香という人物を頼るわけです。

岸田吟香というのは皆さん方でもご存知の方はおられるかと思うのですが、岸田劉生。麗子像を書いた人ですね。この劉生のお父さんです。このお父さんの吟香には僕が新幹線で会いました。バブル景気の良い時の新幹線に豊橋で乗車し、名古屋でお客さんが降りた後、大量の週刊誌と新聞が座席に残っていました。その中で面白そうな雑誌記事をピックアップしてみると、ずばり吟香が出てきたのです。「岸田吟香伝」という漫画です(図6)。すぐ講談社に電話して、このページの絵を報告書に使わせてもらえますかとお願ひしたら、完成品を送ってくれたら大丈夫ですよとの返事でした。

彼は色んなことをやった日本初の国際商人と言いますかね。第一号です。これはどういうことかって言うと、彼は岡山県の山の中の出身です。勉強がよくできて東京の昌平齋で勉強して、そこでいくつかの藩の先生になったりするわけです。この人ものちに武士をやめるのですけど。やめた後、あちこち歩き回って色んな職種の仕事をしました。目も悪くして、横浜にヘボンという宣教師を訪ねます。ヘボンは日本のローマ字を工夫した人ですね。中国のピンインのようなローマ字とちょっと違うのです。そのヘボンのところでお世話になったら一週間で目が治ったんですね。

当時日本の目薬は薬を飲むか筆のようなものでちょっと目をこうさわるんですね。しかし、ヘボンが持ってきた薬は今のような上から薬をドロップさせる点眼タイプの薬であったわけですね。吟香はその技術を教えてもらったわけではなく、目で盗んで技術を習得してのちに銀座で店を開いて大儲けをしています。日本で最初の新聞を作ったり、船会社を作ったり、石油会社やったり、ありとあらゆることをやったそういう人です。何でもやったけども、後から見るとやり過ぎというか、その中でどれがどういうふうに成果を挙げたのかというあたりがちよっと不明瞭なところもあったのです。でも凄い人です。この人が上海で活躍しているから、荒尾はそこへ行って面倒見てもらおうということだったのです。その前には日本の武士一行が上海に行っていたことを上海に行っていた岸田吟香は知っていたのです。その彼のところへ行って荒尾は正直に自分が中国の情報を色々知りたいというようなことで決意のほどを示してお願い



図6 岸田吟香マンガと息子劉生の麗子像

したのです。彼に仕えて目薬を売ると本屋をやる上で、上海は清国を知る上では租界なので外国人の街だから、もうちょっと上流の中心のほうへ行きなさいと言われ、漢口で商売をしたんです。

岸田吟香。こういう人ですね。若い時と大成した時と（図7）。この人もまた大きな人



図7 上海から帰った当時の岸田吟香 (左上) 晩年の岸田吟香 (左下) 愛知大学のロゴ (右)

なんです。その岸田劉生のお弟子さんに高須という豊橋にある豊川堂の方がいて、この愛知大学のロゴを作ってくれたのです。最近ではアルファベットのロゴが流行っている時期ですが、このロゴにはそういう歴史があってもいいんじゃないかと思います。

荒尾精はそういうわけで漢口へ行った時に若い連中に囲まれています（図8）。これはどういうことかと言うと、色んな名前を



図8 荒尾精と漢口楽善堂の同志  
後列左より河原角次郎・浦敏一・宗方小太郎・北御門松二郎  
前列左より井深彦三郎・荒尾精・前田彪

残した若者たちがたくさんいるんです。出身者がどこの人かっていうのを見ると九州出身とか会津、北は関東とか愛知県もおったりしますが（図9）、ほとんどは士族の出身



図9 漢口楽善堂堂員の県別出身地

身者です。ちょうど彼が上海に渡った前後あたり、会津や南九州でそれぞれの戦争がありましたね。幕末には会津藩が官軍にやられた。明治に入ると西南の戦争で薩摩とか肥後国の人たちがやられたと。敗れた若者は日本ではもう登用される先がないと思って大陸へ渡るんです。大陸へ渡った人たちを集めて荒尾が漢口で調査を色々やるわけです。僕は地理学をやっていますけれど、彼らは地理学のフィールドワークの真似事みたいなことをやりました。その結果、清国へ公式に来た若者たちじゃありませんから、あちこちで捕まったり殺されたりしたんです。成果は出しますけれども、結果的には失敗ですね。その中で荒尾精はそういう教えもやりながら自分も調査をして3年半滞在しました。そしてこれは鋳物の製品カタログです（図10）けど、隣の清国にはこんなに素晴らしいものがいっぱいあるから、アメリカやイギリスの遠いところと貿易をやるよりは隣の清国とやったほうがい

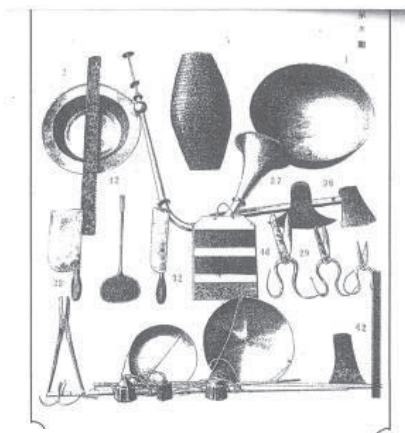


図10 「清国通商綜覧」に掲載された清国産銅器の一部 (同書より引用)

いのではないかという主張です。そういうカタログを作って東京の大博覧会で物産博というのがあった時にこれを出して、それを本にして出したのです。その本が厚い本ですけど、清国の実態を知らしめたので、ベストセラーになった。そういうこともやった人です。

#### 4. ビジネススクール日清貿易研究所

貿易のためのビジネススクールを作らなきゃいけないっていう時に、最初の構想は1890年。日清貿易商会っていう商社を作って、その商社マンを養うために日清貿易研究所っていう付属組織を置きました。当時の清国は貨幣が一本化していませんから、金や銀を含む貨幣の両替の勉強をしなくちゃいけない。これ大変なことですね。まず、金とか銀とか銅が本物かどうかを見極めるという方法は非常に重要です。そういうこともやっているんです。商取引の向こうの慣習っていうのは、日本人とはまた違う色んな習慣があって、それを飲み込まなくちゃ取引なんかとてもできないというようなところで、そういう基礎的なことをトレーニングするのが日清貿易研究所。当初はあく

まで付属だったんです。ところが、これを支えてくれるはずの政府の役人のトップが病気で辞め、総理大臣も辞めてしまうハプニングがあってお金がなくなっちゃったのです。荒尾精は非常に苦労してお金集めをやったのです。その結果、日清貿易商会の立ち上げを断念しました。できないと。その代わりこの貿易研究所のほうを中心的にやろうということで、ここで本邦初めてビジネススクールになって表に出てきたわけです(図11)。

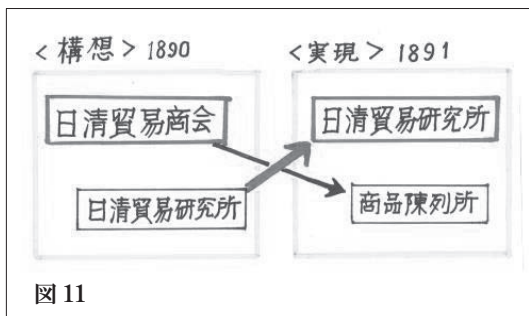


図11

だから、結果的にはラッキーだったと思うのです。ここで色々なそういう日清貿易の取引のやり方を学生たちに勉強させて実業界へ送り込み、貿易実務に従事してもらおうと(図12)。その付属としては陳列所と

- 1 徹底した清語(中国語)教育
  - 2 貿易実務者養成
- 取引慣習  
度量衡、両替  
国、地方事情  
商品陳列所  
ほか

図12

いうものを作って実習の真似事をするというようなことです。目的は徹底して今言いましたようなことをそこで勉強する。

科目はここでご覧になって分かるように、

清国語が 12 時間、英語が 6 時間も学びます。商業地理とか支那商業史、簿記学、商業算、単なる計算のことです。商業簿記と繋がっています。さらに関連した経済学、法律学、習字。これはスペシャルコースですね。柔道とか体操。柔道とか体操をやるものだから中国の人たちは、あれは軍隊が入ってきたのかと思ったりした時期があるという話が残っています (表 1)。

表 1

日清貿易研究所第 1 学年学科予定表 (『沿革史』より)

合計	体育	美術	英語	習字	法律学	経済学	商業算	和漢文	簿記学	支那商業史	商業地理	英語学	清国語	科目		
														前期	後期	
40	6	1		1			3	2	1	2	3	3	6	12	前期	前半
43	5	1	3	1			3	2	1	2	3	3	6	12	後期	前半
	同	同	同	同			同	同	同	同	同	同	同	同	前期	後半
44	6	1	6	1			2	1	1	2	3	3	6	12	後期	後半
	同	同	同	同			洋算	契約文	同	同	支那ノ部	習字	同	同	前期	前半
48	6	1	8	1	1	1	2	1	2	3	3	3	6	12	後期	後半
	同	同	同	同	行書	日清貿易論	同	同	同	同	同	同	同	同	前期	後半

だから非常に実務的なことをやったわけです。戦後、中味を知らない人々はスパイ学校だと風評しました。しかし、そういうことは一つもありません。まさにビジネスの世界の学校を作ったわけです。最初、日清貿易研究所に来た人たちはこういう出身地をみると九州が圧倒的に多いです (図 13)。やっぱり大陸に近いということがあります。広島の人も多い。一番多いのは福岡とか佐賀とか長崎、熊本、広島、香川の人もおりますね。関東のほうはこんな感じ。北陸が非常に多いですが、これは先ほどの近衛篤磨が南京で学校を作る時に最初は学校を東本願寺にお願いしようとしたのです。ところが、東本願寺側は無理だと断ってきて、その代わ



図 13

り石川県で学生を集めるのに全面的に協力しようという話になった。その延長で石川県出身者が非常に多いのです。石川県は今は小さな県ですが、江戸時代は百万石。明治になってからもそういう中心地の金沢は名古屋よりも大きく、中部地方で一番人口が多い町でした。

最初は全国全体で 150 人。300 人応募があつて 150 人選んだ。ところがお金がないままスタートしたところがあつたから、学生たちが不審を抱いてこのままおられないと言って 30 人ぐらい辞めたりすることもあつたんです。最後の学生は減ってしまって 80 人足らずになってしまいました。

しかしその後は順調でしたが卒業生を出した直後に日清戦争が起こってしまったんです。清国語ができる人は当時日本にはあまりいませんでした。そこで日清貿易研究所の卒業生の中から従軍させられたりしたケースが出てきました。ほかに貿易実務で成功していく卒業生も出てくるわけです。

荒尾精はそういう状況を良しとせず、京都の東山に隠遁をしてしまうのです。そこに荒尾精の思想が出てくるのです。今、この会場の部屋の一番向こうの、入って右のところに荒尾の書を展示していますけど、セ



ッケン（石鹼）と読みます（図 14）。荒尾精の思想というのはどういうことかと言うと、「石鹼」というのは自分の身を削って相手を綺麗にする。そういう思想なんです。そう



荒尾東方先生書

図 14 石鹼（セッケン）

いう原理でもってビジネスも含め、世の中を渡っていきなさいと言いますか、人生を送りなさいと。これは根津一にも伝わっていて、さっきの話にありましたように根津一の場合、さらにそれを倫理学のほうにもっていき、次の東亜同文書院を開設した時には根津一は必修科目として倫理の授業を受け持って、例えば荒っぽい資本主義でやるんじゃなくて、相手にも利益があるように双方がウィンウィンの関係でやりましょうと。そういう倫理を持ったビジネスマンを養成するという方向に発展していくわけです。これは日清貿易研究所の先ほどのデータです（表 2）。今言ったように多くの教

え子が戦場へ行ってしまうと、死者もでます。しかし、戦争に勝っても賠償金も領土も取るなど主張します。取ると結局、清国の国民がお金を出すことになる。すると国がますます貧乏になって貿易なんかできなくなってしまう。しかし、世論は戦争に勝ったから領土を取れというような多くの意見の出ている中で、それに反論する書物を書きますが、彼は孤立感を味わうわけです。そういうわけで、前述の東山での隠遁生活の中で随分精神的には自らを鍛えていったんだろうと思います。その後、彼は表に出てくる時には東南アジアとの貿易振興をさらにめざすという立場へ変わります（図 15）。しかし、その第一歩を踏み出した地台北でペストにかかって亡くなってしまいます。まだ 38 歳の若さでした。

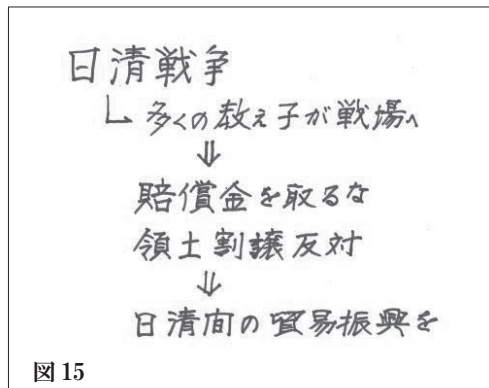


図 15

表 2

合計	体育	臨講義	商務実習	習字	法律学	経済学	商業算	作文	和漢文学	簿記学	史記学	支那地理	英語学	清語学	科目		日清貿易研究所生徒第一学年科目予定表
															時間	週	
40	6	1		1			3	2	1	2	3	3	6	12	時間	週	前半学年
43	6	1	3	1			3	2	1	2	3	3	6	12	時間	週	後半学年
44	6	1	6	1			2	1	1	2	3	3	6	12	時間	週	後半学年
48	6	1	8	1	1	1	2	1	1	2	3	3	6	12	時間	週	後半学年

5. 東亜同文書院の設立

その後はビジネススクール化をより本格化するということで、東亜同文書院を日清戦争の後、最初は 3 年制の専門学校ですけど、次はもう 1 年増やしていわゆる高等専門学校制度に組み込みました。最後は文部省令の中の枠に入り、旧制大学に昇格するという道順になりました。これが新しくできた東亜同文書院の新校舎です（写真略）。

こちらに担当科目も示してあります。内容的には先ほどの日清貿易研究所をより発展させたかたちです。貿易取引を中心にして貿易取引の基本的な手法とか歴史、具体的なマニュアルとかを一生懸命教えたのです。今度は4年間の時の科目です(表3)。科目だけあげてあります。大きくは政治科と商務科の二科あったのですが、政治科のほう

表3 初期の東亜同文書院のスタッフと担当科目(1908年)

職名	氏名	就職年月日	担当科目
院長	根津 一	明治35.5.5	倫理
院教授	法学士・上野 貞正	41.4.15	法律、政治
	法学士・福岡雄太郎	38.19	法律、財政
	法学士・田部 謙	40.12.7	経済、外交史、通商史
	法学士・大村 欣一	40.7.28	制度、外交史、通商史
	商業学士・森川一甫	38.9.9	商業学、簿記、商業実践
	商業学士・中川輝吉	38.12.1	商業学、簿記
	布 雅	40.1.21	英語
	曹 本	41.12.6	中国語
	藤 結	41.4.13	漢文、尺牘、時文
	三 島	41.5.23	中国語
	松 永 手 執	40.7.28	中国語、制度
	高 岡 幸 三 郎	40.7.28	中国語、商品学、商業地理
	小 田 勝 太郎	40.3.28	簿 記
	和田 進 次 郎	41.8.27	中国語
	神 津 謙 太郎	41.1.8	商業簿記
	沈 文 謙(字、少呼)	39.9.2	尺 牘
	藤 慎(字、露知)		中国語
	金 寿(字、半三)		中国語
	道 功(字、建助)		中国語
	ミズ・ア・イン	40.10.23	英語
	ミズ・ス・ハ	41.1.14	英語
	坂 田 利 一 郎	35.10.10	英語
	佐 藤 善 次 郎	41.5.1	英語
	田 中 末 次 郎	41.5.1	英語
	川 野 繁 三 郎	40.5.23	英語
	小 田 勝 太郎		英語
	安 河 内		英語

表4 学科科目(書院)

行政	刑法	民法	憲法	法通論	清国政治地理	清国商業地理	英語	清語	倫理	政治科
法	法	法	法	法	清国政治地理	清国商業地理	英語	清語	倫理	商務科
經濟	國際	商業	民法	法通論	清国政治地理	清国商業地理	英語	清語	倫理	政治科
學	策	法	法	法	清国政治地理	清国商業地理	英語	清語	倫理	商務科
実地	漢文	漢文	漢文	漢文	清国近代通商	清国近代通商	清国近代通商	清国近代通商	清国近代通商	政治科
修学	尺牘	尺牘	尺牘	尺牘	清国近代通商	清国近代通商	清国近代通商	清国近代通商	清国近代通商	商務科
旅行	尺牘	尺牘	尺牘	尺牘	清国近代通商	清国近代通商	清国近代通商	清国近代通商	清国近代通商	商務科

これは卒業生に東亜同文書院へ入学した理由を聞いたものです(表5)。これは今から二十数年前のアンケートです。まだ現役の人たちが1600人ぐらいご存命の時に全員にアンケートしたことがあるのです。私のほうからです。お年を召していたりした

は志願者が少ないものですから途中で廃止されます。これは大正7年の頃の科目です。商務科の場合もこういう科目。さっきとあまり変わらないですけど。トップに倫理があります。これは前述した根津一の倫理学の冠科目となっていました。この授業については書院生は欠席せず、みんな出席したとのことです。清国語は中国語です。英語、清国の政治、地理、清国の商業地理、法学、民法、商法、国際法、経済政策、経済界、財政、清国近代通商、・・・と(表4)。これだけの専門科目を見ると現代の愛知大学における現代中国学部の科目よりビジネススクール的な専門科目がずらっと並んでおり、完璧を期したぐらいのビジネスのための教育を施したということがわかります。

当時、こういうことを教える先生も育てたということが非常に面白いです。

表5 東亜同文書院へ入学した理由(一部に複数回答含む)

内 容	期 ～33	34	35・36	37～39	40	41～45	46	合計
中国で仕事、生活したい	19	10	17	14	11	78	12	161
購買制度、学費安い	16	8	11	8	4	32	2	81
入試制度、派遣制度	1		5	1	3	6		16
地元 中国育ち	1					18	3	22
先生のすすめ	1	1		2	3	4	1	12
親 戚 の すす め	2	2	1	1		1		6
父 兄 の すす め	2					3	4	9
先輩の誘いを聞いて	3	1	3			4	2	13
身近、同級生の入学	1	1		2		13	2	19
身内が中国にいる	3					14	2	20
書院の特色、理念	2			1	1	3	1	8
軍事教練がない				1		2		3
使命感			2					2
好奇心			2					2
中国に近いから				1		1		2
遠くへ行きたい						3		3
合格したから				1		6		7
好奇心						4		4
好き	3		2			1		6
その他						2		2
合計	54	22	48	32	22	192	29	393

(1995年アンケートより作成)

から、全員が回答してくれたわけじゃなくて、ここの集計は300ですが、大体400ぐらいの方が回答してくれたわけです。33期というのは1933年の入学生です。1901年に1年生が誕生しますから、都合がいいです。34期というと34年に入学した。ただし、大学へ昇格する時に38期までいって、大学昇格の時は39になるはずだったのですが、38期生で留年生が結構いたのです。

なかなか厳しかったんですね。そのまま上にあがれなかった。そこで、彼らのために留年生用に 39 期生というのを作ったので、そこで数字が一つ増えたんです。40 期は 40 年に入学したわけじゃなくて、一つ余分にずれてきます。最後が 46 期生となりますが、これは 45 年入学生になります。

中国で入学した理由ですね。中国で仕事、生活したい。募集の原則は各県のお金でもって募集されたんです。有能な人たちがたくさん応募して、ずいぶん激戦だったのです。しかし、入学すれば授業料は県費、しかも週に 1 ドルぐらいのお小遣いがある。これは近衛篤磨とか荒尾等が各県を巡って、県知事を口説いて、あなたの県からぜひ 2 名送ってほしいと依頼したからです。各知事は藩閥政治の出身ですから、近衛篤磨に対しては好きじゃないんです。お互いにね。だけど、日清戦争で勝ったために、例えば京都ですと、京都の西陣を清国で大量に貿易して送り出すことができるんじゃないかと。そういう思惑を各県が期待して皆オッケーしていったわけです。福岡県ですと、二人のところへ 100 人ぐらい応募者がある。そうすると実に 98 人は不合格になってしまいますね。そこで県側から 4 人とか 6 人の入学枠をお願いしますと増やしたりはしている。東北のほうはお金がない県がありました。岩手県は前半期のほとんどは入学者がないです。財政上送れなかったんですね。後半になって送れるようになったという事情もあります。そういう地域差があったのです。当時まだ日本は農業国で、旧制中学を卒業して才能のある人はもう就職しなくちゃいけない。もうちょっと勉強したいっていう人のために当時は師範学校がタダでした

からね。陸士、海兵という軍隊の学校もタダでした。しかし、こういう経済界の、アジアの国際都市で勉強できるっていうんで、新たな国際世界をもっと勉強したいという若人が飛びついたわけです。入試制度、派遣制度。これも各県がそういう制度をとり入れます。地元、中国育ちという若人もいた。卒業生が夏休みには母校へ帰ってきて書院の話をする。それで、応募したいという人も結構生まれたのです。

実際に入学時にどんなイメージを持ったかって言うと (表 6)、特に中国で活躍した

表 6

内 容	入学時に抱いた書院のイメージ											合計			
	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43		44	45	46
海外 (中国) で活躍	8	1	2	3	3	6	2	8	6	2	3	6	4	1	40
異色の学	2	1	1	1	5	5	1	2	2	3	1	2	2	1	28
自由、開放性	3	1	1	1	1	1	1	1	1	4	2	4	4	3	16
個性	1	2	1	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	15
力	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	15
中 国 研 究	2	1	1	3	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	9
日 中 親 善	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12
中 国 研 究	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9
アカデミック	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	11
モダン	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	11
入学してよかった	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
卒業生の学校	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
親善	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
志	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
ビジネスマン	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
その他	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
合計	27	4	2	5	1	8	1	1	1	1	2	1	2	3	45

(1995 年アンケートより作成)

いと、良い学校なんだと、自由で開放的だと。魅力がある、国際政治、日中親善があるなど、そういうイメージや抱負がずらっと並んでいて、少し現実的になりますね。そして、皆がそこにロマンを抱いている。中国で活躍できるのではないかと。そういう期待を持った人たちが多かったことがわかります。

どういうふうな入学数かと言うと、表 7 に示しています。最初は少なかったんです。政治科と商学科とでは政治科はやっぱ少ないですね。ずっとね。一ケタぐらい。まもなく廃止になります。商学科がビジネススクールの本命です。ずっと 100 名はいかないんです。少し増えて。農工科っていうのができます。農業、工業、農工という農学部と

表7

期別	昭和27年																							大正12年																						
年度	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1																		
政治科																																														
商科																																														
一農工部科																																														
二農工部科																																														
中薬部																																														
合計	76	9	8	9	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40										

工学部をミックスしたようなものです。しかし数が多くはなかったので、第一次大戦後の大不況の中で書院はこれを廃止せざるを得なくなりました。書院生は反対しましたが、大不況期でお金の問題があったんです。だから全体で100名足らず。あるいは100名ちょっと超えたぐらい。この辺の人数がずっと入ってきた。

しかし、志願者が増え次第にずいぶん不合格者が増えると、私費生として授業料を払うからぜひ入れてほしいという要望が非常に強まります。全国的に入学者が増えてくるのはそういうことがあるんです。このように感じですね。年によりますが、30人近くの私費生というのは公式に認めています。東京などで一括入試をすると、千人から3千人の応募者がある。これもまた激戦だったんですね。こういう別枠の人たちも入ってきました。朝日新聞とか毎日新聞、満鉄からとか、外務省からとかの派遣生も入ってきました。色んな出自の学生たちがミックスして勉強するようになったのです。これも刺激的だったでしょうね。記録に見えます (表8)。

1937年に大学へ昇格すると、まず予科ができます。いわゆる戦後の学校で言うと、教

表8

期別	昭和27年																			期別	大正12年																							
	計	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29		28																							
東亜同文書院大学 政治科	六四三(入学者数)	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	計	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29											
	六四三(卒業生数)	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	政治科	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8												
	六四三(入学者数)	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	商科																						
	六四三(卒業生数)	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	一農工部科																						
	六四三(入学者数)	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	二農工部科																						
	六四三(卒業生数)	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	中薬部																						
	六四三(入学者数)	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	合計	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29											
	六四三(卒業生数)	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	合計	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29											

養部。それと学部ですね。昭和14年にオープンしますと大変な人気だったんです。100人を超えていく。これはどういうことかと言うと、一つはこの書院へ入ると徴兵制度を猶予されるということがあったからです。東京、大阪など都市部からわんさか押しかけてきた。そういうことで都市出身者数も非常に増えたのです。大学へ昇格すると形が変わってしまう伝統的な大旅行をつけて実施したいっていう気風もあって、新たに付属専門部を作っています。3年制なのですが、そこでもこのぐらいの人たちが入ってきた。合計すると、誕生以来の書院全入学生は5千人ぐらいになるんです。こういうような流れだったのですね。

こっちは書院時代の、先ほどのアンケートに答えた数です。きちんとした大学の統計処理を使うともう少し違ふかたちになると思いますが、どこに出身者が多かったのかと、そういう特色を示してみました。大学へ昇格してからはですね、前述のように東京、大阪あるいは名古屋など都市部がいつぱい出てくる。だから、書院時代と書院大学時代では出身地域ががらっと変わってくるわけです (図15)。こういう大きな変化がありました。

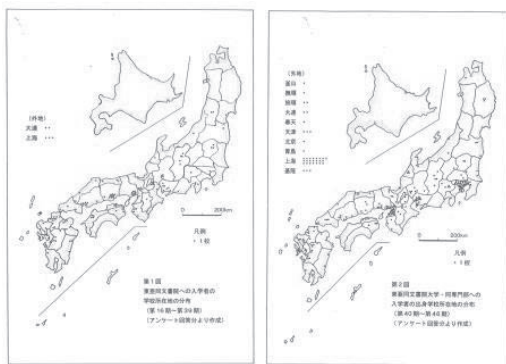


図 15 アンケートにみる書院時代と書院大学時代の出身地の分布



図 16 大旅行 書院生の旅立ちの姿

## 6. 書院生「大旅行」と中国認識

いよいよ大旅行ですけど、これは貿易品の調査を中心に始まります。貿易品をどういうふうに清国(中国)の中で見つけるか。資源の発掘みたいなのがあります。最初は日本人が行ったことのないコースを皆選ぶわけですよ。だから、大冒険旅行。アドベンチャーですね。これをスパイ活動だなんていうふうに戦後言われたりして、書院の人は皆口を閉じます。私は地理学が専門ですけど、そんな大調査旅行は当たり前のことです。それをスパイ活動だとすると、我々地理学がやっているフィールドワークは全部スパイ活動になってしまいます。もう少し分かりやすい例で言うと、最近のNHK番組の「ブラタモリ」。彼は高校の時に地理が大好きだったそうですよ。色々な地形とか、岩石、地盤を勉強してきたでしょう。けれど岩石とか地形だけでなく、それに関係した人文活動にも詳しくなっています。ああいう感じですね。ああいう感じできちんとどこ行って何がどういふふうになっているのか。何故そうなっているのかというのを調査するわけです。地域の仕組みがわかり、旅行が楽しくなりますよ。

これは書院生に旅立ちの姿(図 16)。まる

でアフリカ探検隊みたいですね。こういう格好しないと外国人としては認めてくれない。各調査所、県知事まで挨拶にいった、そこで県の中を歩かせてもらう許可をもらうのです。そういうふうな仕組みで本格的にずっと実施したときには3ヶ月から6ヶ月、足だけで歩く旅行です。鉄道もほとんどありませんから、足で歩いて行く。3ヶ月から6ヶ月と言うとチベットとか西のほうのタクラマカン砂漠まで行けない。帰って来れないからです。満州、東南アジアの中に限られた。だけど、彼らがこういうふうに旅行をして日記を書き、卒論調査として自分たちの関心のあるところへ行き、関心があるテーマを調査解明したのです。軍部の指導で調査をやったと言う人がおりますけど、それは事実誤認と偏見です。彼ら書院生の自主性です。非常に自主性は強いです。

コースは5期生が最初なんです。このきっかけはちょっと説明を省きます。大体各期生毎に十いくつのコース。多いところは20ぐらいあります。それだけで660になり、ちょっとプラスのところがいくつかありますが、これに専門の学校生が最後に実施したコースを加えると700コースを超えます(表 9)。だから僕としては総計は700コー

表 9

第6期(1908)～第42期(1942)の各期別コース表(判明分のみ)

期 別	コ ー ス 数	期 別	コ ー ス 数
5 期	13 コ ー ス	25 期	15 コ ー ス
6 期	12 コ ー ス	26 期	19 コ ー ス
7 期	14 コ ー ス	27 期	17 コ ー ス
8 期	11 コ ー ス	28 期	19 コ ー ス
9 期	12 コ ー ス	29 期	25 コ ー ス
10 期	10 コ ー ス	30 期	31 コ ー ス
11 期	8 コ ー ス	31 期	26 コ ー ス
12 期	11 コ ー ス	32 期	22 コ ー ス
13 期	11 コ ー ス	33 期	25 コ ー ス
14 期	13 コ ー ス	34 期	29 コ ー ス
15 期	14 コ ー ス	35 期	30 コ ー ス
16 期	14 コ ー ス	36 期	21 コ ー ス
17 期	14 コ ー ス	37 期	28 コ ー ス
18 期	23 コ ー ス	38 期	31 コ ー ス
19 期	20 コ ー ス	39・40 期	38 コ ー ス
20 期	21 コ ー ス	41 期	(11) コ ー ス
21 期	17 コ ー ス	42 期	(3) コ ー ス
22 期	18 コ ー ス		
23 期	15 コ ー ス		
24 期	15 コ ー ス		
		合 計	662 + (14)

(各旅行誌より作成)

すだって言ってきたんです。これだけのコースで各地へ入っています。この図(図17)がその一端のコースです。700 全部入れるとコース図が混み合ってくしゃくしゃになるので、ここでは5期から23期。全体の半



図 17

分。しかも東南アジアとか満州は省いてあります。行ける限界は西方では青海省の青海湖ぐらいまで。満州はすべて。あるいは四川省の奥のほう。少数民族地帯。この辺り。上海から旅立って。南のほうへ行く人は船に乗って行きます。お金がたくさんもらってないから。船上でも雨が降るとぬれてしまうところで一般庶民と一緒に行くわけです。なるべく書院の人たちは日本の船に乗りたがる。そこの船長に頼み込んで雨にぬ

れない部屋を貸してもらおうと一生懸命交渉するからですよ。

これは17期から21期。この大旅行がどんどん本格化して発展していった時期です。北のほうから満州、内モンゴル、華北、華中、華南、四川、雲南。テーマをずっと見ていきますとこういうふうになります。最初は鉱業、地下資源、塩、油、綿、繊維、お茶、羊毛、皮、水産、工業、産業、経済、貿易、借款企業、金融、商業制度、水運、汽船、航運です。それに加えてこの段階では移民とか教育とか飢饉、この大飢饉の調査なんかも入ってくるわけです(表10)。

表 10 第17～21期の大調査旅行コースのうち、調査対象別調査地域数の一覧

調査対象/調査地域	満洲	内モンゴル	華北	華中	華南	四川雲南	合計
鉱業	1				1		2
塩業						1	1
油業					1		1
綿花			1	2			3
繊維原料						1	1
茶業				1			1
羊毛、皮		3	1				4
水産			1		1		2
工業			1	1			2
産業					1	1	2
経済	1	4	6	5	5		21
貿易			1	2			3
借款企業			1				1
金融			2	4	1		7
商業制度	2		4		1		7
水運	1			1			2
汽船			1				1
航運				2	1		3
移民					1		1
教育				1			1
飢饉				5			5
計	4	4	17	21	13	8	71

分類が可能な分だけ示したので、合計数は対象年次の総数コースとは一致しない。

華北の大飢饉発生といわれた時は、5グループの班が行っています。これは病気がちでこの年に行けなかった学生が二十何人いたんですね。その時に書院生の旅行班達はもう皆大旅行に行って、この行けない人たちはもう地団駄を踏んで悔しがります。何で自分は病気になってしまったのだろうっていうようなことですね。悔しがって鬱々としていた時に突然、根津院長から君ら行くチャンスがあるぞと。今、華北で飢饉が起こっている。その調査をやっこのい。これは6ヶ月も行かなくていい。3ヶ

月も行かなくていい。2週間ぐらいでやってこいということで派遣されて行ったんです。5班編成です。5班で行って、初めて行った中国の内地を喜んで一生懸命観察して記述して、うち4班はやっぱり大飢饉で大変だったと。根津院長はその報告を見て助成金もらおうとすぐ東京へ飛んで行ったのです。

ところが、最後の1班は船に乗り遅れたんです。その分、他の班よりももう一週間滞在が長くなった。その結果、何が起きたかと言うと、満員列車の上にみすばらしい連中がいつも乗って南のほうへ行く。これは飢饉で食料がなくなるためだろうと。次に田んぼ、畑で作物が非常に上手く育ってないなど。しかし、よく地元で聞いてみると、住民はこれは毎年のことだと言う。しかも毎年、この時期になると皆貨車に乗って南のほうへ行くんだよと。目立つ救援活動の状態も、これもここ数年来のことで別にどうってことないですよという話を聞いて、「えっ」ということになるわけです。それでこの飢饉というのは作られた飢饉ではないかと疑い始め、色々調査したのですね。そこで一体誰がこれ大飢饉だと騒ぎ出したかということを探るとアメリカだとわかった。アメリカは大量の援助を世界中に求めて日本もそれにのった。根津院長はさらにそれに乗ろうと思って救援のサポートを頼みに日本政府へ行った。ところが現場を調べてみるとアメリカが色々動いている。その目的が何かというと、見返りに東シナ海と内陸部に鉄道を敷設する権利を欲しがっているということが分かり、第5班はそれも報告書として提出したのです。

そうしたら書院のトップ、根津さんがす

でに東京へ行っちゃったということで、大旅行を指導する教室は大慌て。慌てて専門の先生5人を現地へ出かけて行ってもらい、もう一回調査をやり直したのです。そして第5班の言う通りだったことがわかったのです。実はこの大飢饉というのはその後の中国の歴史書にも一切出てきません。ないのです。作られた飢饉。人騒がせであったということになります。飢饉の調査をして真実を解き明かしたという点で4班目までは駄目だったけれど、うち最後の1班は非常に大きな功績を残したということがいえるんです。これも旅行記で記録の中に残っているから、それをずっと読んでいくと、そうだったなということがよく分かる。これは私がそういうのを含めて書いたレポートです。

さっき石田先生が説明したような立派な校舎が、内乱等により校舎へ次々に大砲の弾が飛んできて焼けたり、あるいは狭くて校舎が不便になったりしたんですが、三番目に作ったのがこの校舎(図18)。一番良い校舎なんです。石田先生のさっきの写真にあった校舎。ここが本館で、ここから撮った写真かな。こっちのほうに寄宿舎も含め、グラウンドがあって、こっちのほうに校舎、図書

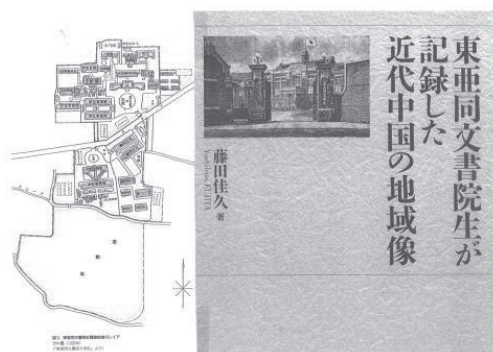


図18 3番目の徐家匯の本格的校舎と配置図

館、病院、学生会館等がある。ここの道路隔てて二つの機能。こちらに中華学生部ができる。商品陳列所もできる。非常に大きなキャンパスを作ったのですね。この時が約20年間。書院が一番繁栄した時です。基本的に優れたベースのキャンパスがあるとそこにいる学生も先生もはりきっているということだと思えます。そういう環境も非常に重要なだろうと。すぐ隣が上海交通大学。隣がフランス租界。フランス租界は立派な建物がある。交通大学もそれに負けないような建物を作ったのです。そこで書院も負けないような建物を作るというわけで根津院長の肝入りの建築士が見劣りしない校舎を作ったわけです。これは上海の絵はがきによくこれは紹介されました。

ところが第二次上海事変の時に中国軍が日本に攻めてきた時は、ドイツの精鋭に育てられた中国軍の精鋭部隊でした。だから日本軍は当初手こずったわけです。随分たくさん犠牲者が出たので、内地からの援軍をもとめ、これを退けた。租界の外側をずっと逃げる中国軍を日本軍が追っかけたさい、逃げて行く中国軍の目の前にフランス租界の外側に立地していた書院の校舎があった。そこに略奪して火をつけられたので、残念ながら宝の山が消えてしまったわけです。図書館の数十万冊は焼失し、学生たちが全国から集めてきた貴重な商品見本の十万点。これもなくなりました。学生諸君が旅行記で苦労して書いた生原稿二十万ページあまり。これも焼失してしまいました。但し、カーボン紙の複製を作って東京の東亜同文会に送っていたから、それが愛知大学になるさいに、創設に重要な役割を果たしたところもあるんですけど、原物は焼けてしま

まったんです。中華学生部等も焼けてしまった。

大旅行の最盛期にはこのレジュメにも色々書いた図をのせましたけど、成熟期には満州、それからその周辺地域。こっちはチベットですからね、ここまで入れない。だから東南アジア。こういう周辺地域もどんどん学生諸君は入って行ったのです。日中戦争が激しくなってくると、日本軍の守備範囲というのが大分減るわけですが、それでも結構奥のほうへも入り込んでいます。東南アジアにももちろん行っています(図19-1)。



図19-1  
成熟期における東亜同文書院生大調査旅行の各コースごとの主要調査地の分布



図19-2  
制約期における東亜同文書院生大調査旅行の各コースごとの主要調査地の分布



しかし、満州事変の直後は満州しか調査ができなかったから皆、満州へ行った(図19-2)。予備調査なしで行かざるを得なかったところがあります。2年、3年と続いたのですが、その時の満州の調査っていうのは今となつては非常に貴重な資料になっています。当時の満州のことを学生たちがこんなにたくさん入り込んで調査しているのですから。これも私はその記録の本を一冊出したことがあります。こういうわけで東南アジアを含めて全部旅行線で生き生きと描いたらもっとラインが複雑になります。

それらの結果から、何が分かるかと言うと沢山あります。これは強盗団、土匪がどこに出たかというのが分かるわけです(図20)。



図20 旅行コースに記された土匪の出没地

調査記録の中をたくさん読んでいくと。当時、軍閥でお互いに省の間で戦争にあって、負けた省の軍人中が省境へ逃げて行くわけです。そこに土匪が集中します。それから時々大洪水が起こります。長江とか黄河などです。ところが当時の中国の水害はスケールが違います。農民が一度に20万人も亡くなってしまうのです。被害者は職もなくなるというわけで強盗団に早変わりするんです。強盗団、土匪の発祥地です。

1925年5月30日に日本の紡績会社でデモがあつて街頭へ出た時に、イギリスの兵隊が撃った事件です。これがその前からあつた排外運動に火をつけて、あつという間に全国に拡散しました。書院生は5月30日の前に出発していました。だから現地ですれに遭遇するわけです(図21)。議論を吹



図21 旅行コースに記された排日・排英・排外運動がみられた都市

かけられたり、宿屋を紹介してくれなかったり広がったのです。食料を売ってくれなかったりとか随分あちこち抵抗をされたり、あるいは議論を持ち込まれて議論大会をやったりとか、色々班によっては違うんですけども。それが砂漠のほうまで広がって行ったんです。しかしそこでデモやっているのはほとんど小学生で。小学生が旗持って「反対」って叫ぶのをオルグの青年がやらせている。普通のデモとはちょっと違うのです。これがおそらく中国がナショナリズムに目覚めた第一番目の時だったと思われれます。全国民が自分の国のことを初めてちょっと意識したそういう時期だったろうと思います。それまでは自分の国のことを思う中国人は非常に少なかった。そういうオルグの人たちの宣伝効果でしょうかね。それで全国一斉にナショナリズムが出てく



信、ジャーナリズムも多い。その人たちがどこで活躍したかを示した 1934 年の図です (図 25)。満州も入ってきますから。上海、華北以外にも満州の勢いがみられます。

日本の国内では東京、関西、北九州が多いです (図 26)。そのほかは個人的でバラ

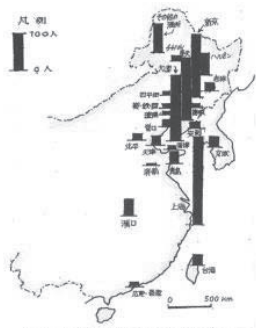


図 25

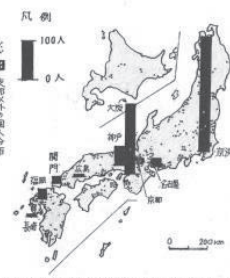


図 26

バラになっています。世界各地での活躍もみられます。とくに貿易実務の商社マンとして各地へ行っている。これは同窓会のまとめりとしてみた図です (図 27)。上海とか漢口とか香港とか青島とか北京、満州、東京、大阪などが支部グループで、こういうグループで同窓会組織が強固に作られていました。

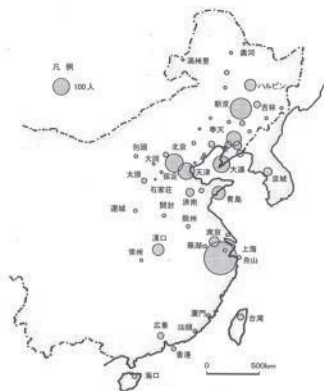


図 27

終戦になって引き上げて第二の人生をやらなくちゃいけなくなった時にビジネス

クルの効果ってどういうふうになったのか。戦後の職業をみてみますと、やっぱり貿易商社がナンバーワンです。製造業、出版、先生、こういうようなビジネス界が非常に多いです。教育、ジャーナリズムも入りますけどね。先輩たちとの繋がりというのはものをいうわけです。先輩が後輩の就職の面倒をみたりするっていうのは当たり前前のところがありました。その繋がり。親しく強い繋がりとか伝統精神、面倒見がいいとかいうようなことが分かってきて、書院生の結束力が非常に強かったことがわかります。当時、外地にありましたから、それが結束力になったのでしょう。

他大学と自分たちはどう違うかと聞いたところ、愛校心と団結力で、書院は強い、視野も広い、中国への理解と愛着がある、国際的なセンスがある、礼儀正しいとか人情がある。また、積極的だとか使命感がある、個性的であるなど、そういうところが書院の特徴だと自己評価しています。これが同窓会です (写真略)、図 31 参照。多くのトップクラスの人たちも集まって毎年同窓会をやっている。

では、そういう卒業生たちがどういうふうなかたちで活躍したかを以下、みていきます。例えば、それがこの図です (図 28)。縦軸に 1 期から 46 期をとります。戦前では例えば、28 期 (図中の (A)) と 35 期 (図中の (B)) をとりますと、この辺のところから入学してずっといきますと、戦後引き上げて来てからちょうど 40 歳の頃に高度経済成長の始まりと重なります。この人たちはちょうどそこにぶつかる。そういう 28 期生たちが戦前はどうか、戦後はどうかだったかというのを見ますと (表 12)、そ

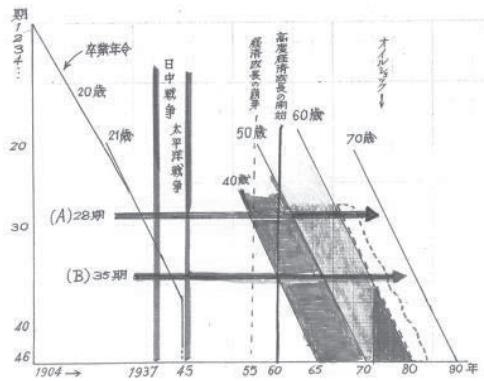


図 28 書院卒業生の年齢と年代構成の概念図

表 12

28期生の軌跡 卒業後の進路(銀行、メーカー、商社から)	
職前	職後
M.Z. 横濱正金銀行(奉天→漢口(ペル辛)→銀行預取) →漢口の商業地産開発(親友の提携管理職知) →上海へ転出	1948年 東京銀行附属支店(正金での国際信託設立) →日本の紙業業界を再興し、通商銀行、ポットマンの創始
D.K. (外務省留学生)→北京公使館→満洲中央銀行 →1940年 熊本館(機密担当)	宮城中心の労働運動(工友連、東武)→神奈川機労委
T.S. 満洲中央銀行(長春→所長→所長→所長) →満洲中央銀行への転出(銀行)→満洲中央銀行 →日航(東京→香港)→定職	東京
S.T. 日本製作所(ハコックス年輩)→満鉄担当 →日貨製作所(機務担当)→所長→所長→所長→東京 →上野実業(1938年、日本製鋼所)→東京 →日業製鋼(シワ、タ)で外人工場責任の責任者	一般文具関係→1992 早稲田大学工務部下 →1994 ハイロックススーパーの建設的助成 →インク、エンボス、プリンター→後半(後半)2008年工場 →パソナ(シワ、タ)で外人工場責任の責任者 →建設的助成
Y.V. 日商銀行(東京→広島→岡山→大阪本社) →日航(岡山48期留生→所長→所長)	日商銀行(本社→岡山→本社→東京→所長→広島→広島)

のまま引き継いだ人も多し、変わった人もいます。結構ビジネスマンとしてあちこち仕事をやりながら定着したことがわかります。これは 28 期生がどういう仕事に就いたのか。満州国もあります。満鉄がある (表 13)。

一方、35 期生もやっぱり同じように満鉄が多いですね。住友、三菱とかずらっと並びます。ほとんど商社及びメーカーです。

これは本格的な大学になったときの担当の教授と科目です (表 14)。ここにもまだビジネススクールとしての科目がたくさん入っていて、やっぱりそれを発展させたということがわかります。大学昇格後については、ここでは 42 期だけ取り上げました。今日も来ていただいている森さんがこの 42 期生による人生記を戦後にまとめた本を見つけたので見せてもらって、少し分析してみました。その中に自分の人生を寄稿し

表 13

28期生の軌跡		
職前	職後	人数
満州国	銀行	3
	経済団体	1
	製業	2
	自営創業	4
	(病院:2)	
	(製紙:1)	
	(市場:1)	
満鉄	公務(市員ほか)	2
	貿易(ハワイ)	1
	製業	2
	倉庫	1
	自営	1
民間銀行	銀行	1
	石油	1
	鉄鋼	1
	自営日系	1
ほか民間	公務	2
	メーカー	2
	教員	2
	森林連合	1
	製紙製業	1
東証	金融	1
	持業会社	1
外務省	インドネシア/中国	1
	大使館 入省管理	1

28 期生の軌跡 (上)

35 期生の軌跡 (下)

35期生の軌跡

職前	職後	人数	職前	職後	人数	
満鉄	銀行	1	三井物産系	商業組合	1	
	メーカー	1		議員 (不詳)	1	
	公務	1		伊藤忠	2	
	議員	1		物産設立	1	
満州系・台湾系	銀行	1	丸紅	銀行	1	
	公務	1		食品 (不詳)	1	
	教授	1		豊松	製業	1
	公務	1			(シンガポール)	1
三慶重工業	銀行	1	三井物産系	豊松江藤	1	
	製業	2		江藤	1	
	公務	1		製業関係	1	
	製業	1		製業	2	
吉河系	トヨタ系	1	製業	製業関係	1	
	食品	1		製業	1	
	銀行	1		製業	1	
	製業	1		製業	1	
鉄鋼	銀行	1	ほか梅花	建設	1	
	製業	1		水電	2	
	機械輸出 (フィリピン)	1		製業	1	
	製業	1		ほかエネルギー	4	
住友系	住友	2	住友系	住友	2	
	三井	1		電気	1	
三菱系	三菱	1		三菱系	三菱	1
	三菱	1			三菱	1
汽船	汽船(USA)	1	汽船		メーカー	2
	公務	1			パイロット(万年筆)	1
製業	公務	1		製業	製業	1
	メーカー	1			製業	1
ビール	ビール	1	ビール		日本水産	1
	メーカー	1			(海外)	2
製業系	メーカー	3		製業系	エチオピア	1
	メーカー	1			エチオピア	1
製業系	メーカー	2	製業系		エチオピア	1
	メーカー	1			エチオピア	1
製業系	メーカー	2		製業系	エチオピア	1
	メーカー	1			エチオピア	1
製業系	メーカー	2	製業系		エチオピア	1
	メーカー	1			エチオピア	1

た人が 60 人くらいいます。それをずっと読んでいくと、寄稿した人の出身地。大学昇格してからの人が多いです。都市部が多いんですけどね。こんな感じです (図 29)。

商社系の人たちは出身地、県別にどのような業務に就いていたのか。色々転々としていますけど、最終的に落ち着いたところをずっと挙げました。公務員、地方公務員。このつづきがまだ続くんです。メーカー系もある。マスコミ、出版、大手の新聞社とか色々ある。こういうわけでビジネススク



表 16 42期生の職種別就職者数

職 先	就職人数	計(中間年度)
商 社 系	12人	5人
メーカー系	8人	
マスコミ出版系	8人	5人
国家公務員系	5人	1人
地方公務員系	5人	1人
交 通 系	3人	2人
建 設 系	2人	
公務員(士)系	2人	
金 融 系	2人	
エネルギー系	1人	
教育研究系	2人	
看護士系	1人	
協賛組織系	1人	
医 療 系	1人	
木質下管理系	1人	
海外居住	2人	
合 計	56人	14人

(「『遷転速報』(第三集)からの判明分)

きてしまう。その時、ちょうどそこへ愛知大学ができたから愛知大学へ行きなさいという指導があり、書院の人たちも外地の学校中退学生たちも愛知大学へ沢山入ってくるわけです。愛知大学へこの東亜同文書院からの編入生が分かっているのは160人ぐらいですが、そのうちの半分ぐらいの就業状況がわかってきたのです。それをずっと見ていきますと就職種は同じです。同じような傾向で活躍している(表17)。

表 17

戦後 愛知大学へ編入・入学した東亜同文書院生の就職先

就職先	44期生		45期生		合計	主な就職先
	学部	専攻	学部	専攻		
商社・貿易系	2	4	8	7	22	東武百貨、住友銀行、三井物産、伊藤ハシ、古河電工、住友電工、白ロウス等、各紡織
メーカー系	3	3	3	4	9	住友銀行、三井銀行、東和物産、山形製紙
金融・証券系	1	1	1	1	4	東友銀行、三井物産、三井物産、山形製紙
商 業 系					1	建設省、住友銀行、愛知運送
運輸・交通系					2	建設省、住友銀行、愛知運送
交 通 系	1	1	2	1	4	出光石油、北米興業、中野電機、万能社
広告・情報系					1	建設省、住友銀行、愛知運送
税関・コンサル系					1	建設省、住友銀行、愛知運送
労働士系					1	建設省、住友銀行、愛知運送
労働系					1	建設省、住友銀行、愛知運送
新聞出版・印刷系					2	建設省、住友銀行、愛知運送
国家公務員系	1	2	2	1	7	建設省、住友銀行、愛知運送
地方公務員系					1	建設省、住友銀行、愛知運送
看護・看護士系	3	2	2	2	10	建設省、住友銀行、愛知運送
自 衛 隊					2	建設省、住友銀行、愛知運送
合 計	8	13	22	20	82	

(「『東亜同文書院大学史』の判明データより作成)

一方、終戦直後1年間のうちに帰ってきた人たちは、愛知大学がまだなかったので他の大学へ編入された。その中で多かった行先は一橋と京大です。とくに一橋は本間先生の書院へ来る前の学校だし、書院で中国語を教えていた先生が一橋へ戦争が終わ

る前に行っていましたから、筋を頼ったのでしょね。それにやっぱり商業系の学部だったです。就職先は商社、メーカーへより特化した傾向がみられます。ただ、注目すべきは一橋へ編入したただけのうち15人が就職不明なんです。ということは、他の学校へ入ってやっぱり書院が恋しくてということで一橋の中になじまなかったんだと思います(表18)。

表 18

東亜同文書院大学から一橋大学への戦後編入生の就職種別人数(42~45期)

職 種	人 数	主な就職先
商 社	7人	又-(2)日産(2)第一
メーカー	8人	富士製鉄、東芝(6)明管、日産、三菱I-コン
金融・保険	6人	富士銀行、十八銀行、住友銀行(資本)、野村
輸 送	1人	日本郵船
製 菓	1人	明治製菓
マスコミ出版	1人	雑誌ダイエモンド社
不 明	15人	-
合 計	39人	

(「『如水会』資料、一橋大学図書館資料より作成)

一方、愛知大学が終戦の翌年に設立したあと、編入学した書院大学、同専門部の編入生についてその就業状況を判明分についてのみまとめて示すと表19のようになる。それによると商社、貿易系が全体の3割を示し、伝統的な書院生の動向と重なる。次いで金融、証券、メーカーとつづき、いずれも各分野のトップ企業への就業先が目立つ。また、メディア、国家公務員、教員や研究者への就業志向も書院時代の延長にある。そして書院以外の旧制愛知大学卒業生も愛知大学が書院系ということで、書院からの編入者と同様の就業傾向を示し、ビジネススクールの伝統が旧制大学としての愛知大学へも継承されたと言える。

以上の中で珍しいことが香川県にあって、今日皆さん方のプリントの後ろに出てきましたけど、育英会というのがあったことで

表 19

戦後 愛知大学へ編入・入学した東亜同文書院生の就職先

就職先	43期生		44期生		45期生			46期生			総計	主な就職先
	学部	専門	計	子科	専門	計	子科	専門	計			
商社・貿易系	2	2	6	8	2	7	9	3	3	6	25	兼松江南、岩井産業、三井物産、伊藤忠
メーカー系	2	3	3	3	4	4		1	1	10	古河電工、味の素、パイロット万年筆、各紡織	
金融・証券系		1	1	1	1	2	6	3	9	12	住友銀行、三井銀行、東京相互、山一證券	
商業系								1		1		
運輸・交通系			1	1		1	1				2	播磨商船、愛知運送
資源系		1	1	2	1	1	2				4	出光石油、出光興産、中部電力
広告・情報系					1		1	1			2	万年社
税理・コンサル系		1		1					1		2	公認会計士、税理士
弁護士系					1	1	2				2	弁護士
労組系					1		1				1	医療労働組合協議会
新聞・出版・メディア系		1	1	2		3	3	2	1	3	8	朝日、毎日、読売、NHK、CBC、ラジオ関東
国家公務員系	1		2	2	1		1	1			5	運輸省、農林省、税関(大阪、名古屋)
地方公務員系									1		1	都庁
教職・教員・学校系	3		2	2	2	2	4	4			13	
自営業系						2	2				2	
合計	8	9	13	22	10	22	32	20	8	28	90	

(『東亜同文書院大学史』の判明データより作成)

す。これがその東亜同文書院大学への留学生派遣規程です。同会から1、2名を書院へ派遣するから応募に来てほしいという条件がずっと書いてある(図30)。成績のレベルも規定されている。ずっと見ていきますと、この時はお金を貸与しますとなっているのです。普通の県費生なら給付金制度ですが、これは戦時中のことですが貸与金制度の事例です。

給付制でそのままお金をあげるといっわけにはいかない。就職したらこれだけ返さないよと貸与金の規定が書いてあります。この時期、香川だけでなく、他の県や市町村などが貸与金で書院進学を誘っています。それを示す公募要領が残っていたのはもの

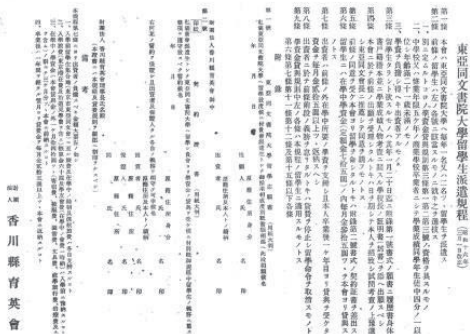


図 30 東亜同文書院大学留学生派遣規定

すごく珍しいんですよ。私が入手したのはこれだけなのです。だから、非常に貴重な資料かなと思います。これはまたあとでゆっくりお読み下さい。これが、さっきの石田先生のところにもありました香川県出身者の人たちの主な就職先です(図31)。これを整理するとやはり同じようにビジネススクールの成果が出ているし、「毎日新聞」の社長というジャーナリストも含まれています。



図 31 香川県出身東亜同文書院生の軌跡(判明分)

次は戦後の四国の地区、各県の支部の同窓会の様子です。高知の代表この方は岡村さんというテレビ会社の社長になった人です(図31の右例)。

## 8. おわりに

戦前の就職、戦後の就職を見ますと、基本的にはビジネススクールの延長上で皆さん仕事をやってきたということが分かります。多くのメーカー、ジャーナリズム、教育、研究者、文化人、多様な幅を持ちながらこの辺に中核をおいてビジネススクールの役割を果たしてきたといえます。中国との関わりを重視するという意味で言うと非常に国際的でディベートのできるコスモポリタン。だから国際人。おもいっきり議論するけど相手を恨まない。喧嘩しない。終わったらさっぱりする。こういうのは国際人、貿易マンとしては非常に適している。ここは重要な資質です。

戦後、日本の高度経済成長を担った人たち。ということはどういうことかと言うと、失われた 20 年とか何とか言われますけど、これは彼らが第一線を去った途端にそういうことになってしまったと言っても過言ではないでしょう。つまり書院卒業生は外地を知っている。外地から日本を見ることができる。アジア全域から引き揚げで帰ってきた人達もそうですけど、そういう外地から日本を見て、外地に何が必要なのかというイメージで物を作ることが出来、その情報提供ができるという階層がなくなった影響でしょう。今の日本の若い人たちは外へ行かない。外へ行かないと日本の商品はやっぱり売れない。

イギリスにいた時に思ったのですが、当時の日本のトップはソニーでした。ところがその後、韓国に代わっちゃったんです。韓国のテレビの技術は低かったからテレビ屋さん行っちゃって頂上はソニーで韓国製は低いところに置かれていたけれど、日本か

らの輸出テレビは日本人が好きなシルバータッチでした。韓国の人たちは最初第3世界を商売の相手にしていました。先進国は日本が独占しているから入れなかったんです。しかし、韓国の新卒がイギリスへ派遣され生活させた結果、イギリス人の目はそんなに良くないと。黒いピアノタッチの枠がいいんじゃないかっていうわけで黒いタッチのテレビを作って送り出したら、そっちがソニーを上回っちゃったわけです。

だから、日本人は日本の思惑でいい技術だからどこでも売れるって思うけれども、消費する人たちは国によって皆違う。その辺は書院の人たちは理解していたけれども、現在はそういう人材リーダーはいなくなってしまった。技術だけで勝負している日本、ということから言うと、その限界を打ち破って国際性を身につけた書院が、今の時代になってあらためて日本で再評価できるんじゃないかなと思います。もう少し大きく言えば、戦後の日本の高度経済成長を支えた根幹には書院生とその精神が大きな役割を果たしたのではないかという私の仮説をかなり裏付けられたのではないかと思います。これが今日の結論です(表 20)。すみません。長くなりました。終わります。

表 20	
<b>おわりに</b>	
1.	多くの貿易系人材を主に、メーカー、ジャーナリズム、教育、研究者、文化人の輩出。
2.	中国とのかかわりを重視→国際化
3.	ディベートのできるコスモポリタンが育つ
↓	
4.	戦後日本の高度経済成長を担った
5.	しかし、彼らが第一線を去ると「失われた20年」
↓	
6.	海外経歴からの視点→ <b>「書院教育システムの再評価を！」</b>



**司会者:**ありがとうございました。本日の講演の中で質疑等ございましたら挙手をお願い致します。

**男 A:** 上海にある大学は今でも残っているのですか？

**藤田:** 一番良い学校を作ったんですね。それはさっき言ったように第二次上海事変の時に焼失してしまった。その後どうしたかと言うと、隣の上海交通大学は日中戦争のもとで皆、重慶に移っちゃったんです。そこが避難民の人たちの避難場所になっていた。そこで許可を得て避難民に除いてもらって、書院の人たちが入ってきた。最後の7年間はこの交通大学で勉強したのですね。だから、最後のほう書院卒生の人たちは交通大学を自分の母校だと思っています。そこで戦後になって校舎を向こうに返還した後、上海交通大学の博物館が、この学校は日本の東亜同文書院大学に占領されたと掲示している。それを見た書院の卒業生の人たちがこれは何とかしなくちゃいけないと、何故書院がこういうふうになったのか。あるいは書院はどんな学校だったのかっていうのを日中間の共通の資料をベースにして研究しましょうというのが書院卒、愛大卒の北川さんで、霞山会の理事長として提案し、向こうの交通大学の副学長の一人を口説いてそこを突破口にして研究会を実施した。その時、霞山会の星常任理事も中心的にサポートされました。日本側は私が代表で、向こう側は上海交通大学校史編纂室の葉郭平先生。この二つのチームが合同で数年間あくまで史資料をベースにした東亜同文書院研究をやって、その成果を上海の交通大学と愛大の豊橋校舎でこの先生方も交えて2回やったんです。そこでお互いが友好関係

を作った。記念センターは今も交通大学校史編纂室と交流をしています。交通大学が昨年120周年記念の大学史全巻を出したので、その中でどういうふうに書院のことを載せてくれるのか、かなりイデオロギー的なかたちで扱われるのではないかと気にしていましたが、穏やかな扱いでした。ただし、書院(現交通大学)の校門から学徒出陣の書院生の写真は掲載されました。こういう研究会をお互いにやったというのは成果があったのだと思います。今、上海交通大学は大きな博物館の建設で、来年4月にオープンします。書院のことも当然出てくると思うんですけど、それがどんな表現になっているのかというのはちょっと気になっています。

**男 A:** はい。分かりました。

**女 B:** 私は愛知大学の卒業生でも何でもないんですけど。東亜同文会に関心がありまして。東亜会と同文会が一緒になりますね。もちろん一緒になったわけですから同じ主張が一致するところはあったと思いますけれども。東亜会と同文会の違いがあったのかどうか。その一致の中で何か議論はなかったのか。

**藤田:** 同文会のほうはそれこそ今日ご紹介しました近衛篤磨公を中心とした、その後、東亜同文書院を支えていくようなメンバーが中心で、近衛さんはアンチ藩閥政治、アンチ明治政府です。同じように政治色は対清国との関係でも排除する。ところが、東亜会のほうは政治色を主張する人たちがいっぱい、そちらの人たちが政治的な問題をどんどんやろうとして、当時、清国を倒そうと考える人も出てきます。けれど、近衛さんもそれをやったらこの組織がすぐ清国から嫌

われてしまう。我々の活動はできなくなるというわけで、東亜会と同文会が合併した時の会長は近衛さんになり、東亜会側の主張を全部抑えたわけです。あの時に清国から逃げてきた数人の人たちがおり、東亜会はその人達を受け入れようとはしますが、近衛中心の同文会はその受け入れに反対し、全体の意見としました。彼らはアメリカへ逃げて行ったりしていますね。

近衛さんのリーダーシップというのは今日ご説明したように、学位を取ったり勉強したりと、他の人ではとても太刀打ちできるような人ではないですから、その説明で統一をしたということです。では合併を何でしたのかと言うと、元々同文会も東亜会も金がなかったからです。両方の組織がそれぞれ外務省へねだりに行ったんです。嫌われているからちっともうんと言ってくれない。それでも粘り強く交渉したら、似たような組織が二つあるじゃないかと、合併してきたら多少出してもいいと言われたのです。やはりお金の問題なのです。そこで、いかに自立して学校経営をやるかというので、県費制度を県のお金で学生を募集するというようなかたちをとり、独立してやっていくという学校運営をやっていたのです。後になって色んな政局が変化したり、東亜同文書院の会長が変わったりしていくと、少し対応に変化が生じますが。それに特に東亜同文会側が対応せざるを得なくなってくるというところはありますけどね。あくまで東亜同文書院は確立されていました。純粋なかたちのところ。後半は同会が発展し運営費を少しもらったりしますけどね。そんな回答でいいですかね？

**女B:** はい。

**司会者:** よろしいでしょうか。では、これで本日の講演会を終了させていただきますけれども、最後にアンケートのほうをご記入いただきまして出口のほうの係員のほうにご提出下さい。本日はありがとうございました。

[付記]

以上の内容については、2020年3月に「あるむ」から藤田佳久編著『東亜同文書院卒業生の軌跡』が刊行された。こちらも参考にしていただければ幸いです。